



幼児の友人関係 (一)

高 桑 康 雄

△二▽ 対人関係の発達

子どもが、他の子どもたちと結びつきをもつようになるのは、二才ごろからといわれているが、その芽ばえはすでに乳児期に見ることができるといえる。

ヘツザー (Hezzer, H.) は、乳児のもらい泣きについて、声だけが刺激となっているのか、姿を見ることが意味をもつのか、を検討するために、二人の乳児のあいだに衝立てを立ててみた。すると、生後二週間の子どものについては衝立てに関係なくもらい泣きをする者が八四パーセントであるのに、二か月以後では衝立てのある場合には泣き出す子どもが一〇パーセントに減少するが、衝立てにさえぎられていない子ども同士では泣き出す者が三二―四二パーセントである、といわれる。

またモレノ (Moreno, J. L.) は、ソシオメトリー (sociometry) の研究の一環として乳児における人間関係を観察しているが、かれ

によると、九人の乳児を誕生以来一八か月間同じ部屋に生活させたところ、二〇―二八週ごろから近くの子ども同士のあいだで反応しあうようになり (水平的分化—Horizontal Differentiation)、四〇―四二週ごろから集団の中になたての関係をうみ出すような命令をくだす子どもが現われてくる (垂直的分化—Vertical differentiation) という。

一才に満たないこの時期における子ども同士の交渉は、友人関係への第一歩として意義あるものではあるが、それはかれらが偶然に身体的な接近や接触をすることによってうまれる。これをききえていけるのは運動機能の発達であろう。その意味で、おもちゃの存在は単に運動機能の発達を助けるだけでなく、かれらの接触をうながす役割りを果たすものとして発達の重要であるといえるであろう。

しかし、この段階はいわばおもちゃに遊ばせてもらっている時期とも考えることができ、子ども同士の心理的な結びつきがあるとは

いうことはできない。

子どもの情緒が発達してくるにつれて、二才ごろから、いわゆる友人関係もしいにはつきりしたがたをあらわしてくる。このことは、子どもの自我がすこしずつ明確化し、人格の中核的部分が形づくられてきたことにより、そこに自我の拡大を求める要求が発生したことを表わしているとも考えられよう。そこで、二才以後の友人関係の発展をみていこう。

日本女子大学附属児童研究所では、ブリッジス (Bridges, K.) のものを翻案した幼児の社会性発達尺度を作っているが、それは、二才から五才までの子どものおたがい同士の行動についての三〇項目、三才半から五才の時期に見られる行動二〇項目を列挙している。

前者には、接近、まね、参加、援助、じゃま、攻撃などがふくめられ、後者には、共同、世話やき、他人の擁護、謝罪、命令、などがとりあげられている。

ここに示されている発達の方向は、表面的な、自分と友人との一対一の関係から、しだいにより大きな集団の人間関係、より内面的な関係へ、ということである。

シロテルン (Stern, E.) は、幼児における集団生活を次の三つの段階にわけている。

- (1) おたがいにそばにいる (Beinander-sein)
- (2) 集団の発見 (Entdeckung der Gruppe) — 活動の内容はともか

く、集団の中にはいる

(3) 協働 (Mitteln) — 組織された活動の中で役割りをもち、活動の内容をとらえうようになる

この側面における子どもの発達は、かれらの活動の中心である遊びの中に見るのが一般である。

子どもの遊びにおいて、まずその集団の大きさが増大することが認められている。

ビスリッキー (Wislicky, S.) が三才から六才一か月までの幼稚園児の自由遊びにおいて観察された一七三の集団の構成人員を調査した結果では、三人が最も多く二三パーセント、二人、四人、五人の順になっている。

これをもうすこし年令別に見たものにグリーン (Green, E. H.) の研究がある。それによれば、二才では、ひとり遊びは六〇パーセントをこえ、相手一人の遊びは三〇パーセントに近い。相手二人は約九パーセントで、相手三人以上は二パーセントぐらいである。しかし、五才になると、ひとり遊びは三〇パーセントをすこしこえた程度となり、相手一人が約三〇パーセント、相手二人が約二三パーセント、相手三人以上も二〇パーセントに迫っている。

集団の大きさの増大とともに考えられるのは集団としての行動の組織化ということである。このことについては、ブラッツ (Blatz, W. E.) が、ひとり遊び、傍観、並行遊び、集団遊び、おとなの相手の五種類にわけ、二才児から四才児までを年令別に考察してい

る。その結果、ひとり遊び、傍観などが四―五才ではいずれも一〇パーセント以下に減少し、集団遊びは二―三才で二七パーセントだったのが四―五才で七二パーセントに増加していることがあきらかにされている。

同様の研究はパーテン (Parten, M. B.) らによってもおこなわれている。ここでは、

- (1) なにもしていない
- (2) ひとり遊び
- (3) 傍観的行動
- (4) 並行遊び
- (5) 連合遊び
- (6) 協同的・組織的遊び

に分類されている。

このように、幼児の友人関係は、乳児期からしだいに広がり、深まりをもち、その活動は組織化されていくといえる。そして幼児期においてもなお、おもちゃの存在が重要であることが認められる。その役割は、乳児期の末期のように「子どもを遊ばせる」というものではないが、たとえば、その子ども自身よりも、その子どもも持っている絵本・おもちゃ・三輪車がめあてで交渉が保たれる例も報告されている。もっともそういう例ばかりではなく、ある程度の心理的なつながりをもった友人関係もまた存在する。

しかし、幼児の友人関係が基本的には家族、とくに親の行動や判

断の価値規準によって制約される、ということは特徴的である。ある意味においては、友人の選択、活動の範囲、内容、すべてが規制されている、といつてよいであろう。特殊な例かもしれないが、「幼年期」(波多野勤子)における一郎が、友だちをほしがり、二つちがいの従兄弟と母との外出を非常にうれしがっているが、ここでも完全に親の制約のもとにおかれているのである。

△二▽ 幼児の集団のダイナミクス (1)

幼児の友人関係において、子どもたちのコミュニケーションがどのような構成をしているかをまずみてみよう。

奈良女子大学付属幼稚園が、砂遊び場における幼児の結合を観察した研究を発表しているが、そのなかで、子どもの交渉が成立した

場合の媒介は何かを見ると、第一表のとおりである。ここでみられることは、遊具、作品が全般的に多く、ことばの位置はまだ高くない。幼児の友人関係が遊びを中心に展開し、遊びの中でふかめられていく、と考えられるのであるが、そのさい、これらの物体が媒介となっていることは、注目してよいことである。前節の終りにふれたように、幼児の友人関係におけるおもち

第1表

項目	遊具	作品	ことば	動作
3才	43.9	22.7	30.3	3.1
4才	41.0	28.8	23.8	6.4
5才	29.1	37.9	28.7	5.3

や、あるいは広く遊具の役割りをここにも認めることができるであろう。

さらに、この研究では、交渉の経過を働きかけと反応の型の分類によって行なっている。それによると、協調的な働きかけが三―五才を通じて非常に多く、約六〇パーセントをしめている。その内容は依頼・協力のかたちから、提案という方へ移っていること、それに対して強圧的な働きかけは年令と逆に減少していくことがのべられていいる。

反応の方をみると、協調的の反応が各年令を通じて約七〇パーセントをしめているが、単なる許容・服従・応諾・同意などが五〇パーセント近い。一方、批判的・拒否的の反応もまた増加している。

この研究の示していることのひとつは、五才児においては協調的な働きかけができる一方、批判的・拒否的の反応が増加していることから友人関係におけるひとつの転機に立っている、ということであると思う。

このようなコミュニケーションの様式と関連して友人関係の構造をみておくことが必要であろう。

田中熊次郎氏は、幼児の小集団の構造について、三人グループの場合と五人グループの類型をまとめている。そのうち、男、女それぞれ主なものは、次のようであるとされる。

(1) 三人グループ

(a) 男児 ①著しく目立つ専制支配的幼児がいて他はこれに追

随、または並行的行動をする (BS 類型)

②勢力のほぼ等しい者同士の対立競争 (ES 類型)

③楽しい陽気な連合グループ (MA 類型)

(b) 女児 ① ES 類型

② MA 類型

③あるひとりが排斥されてにらみ合う (RH 類型)、専

制支配的な幼児がある子どもを排斥する (BR 類型)

(2) 五人グループ

(a) 男児 ① BS 類型

② ES 類型

(b) 女児 ①ボスのな子どもがある子どもを排斥し、孤立させる

(IR 類型)

② ES 類型

また、男女混合の五人グループでは、BR 類型がきわめて多く観察されている。

これらからみて、幼児の場合、集団場面での人間関係には排斥的な傾向がかなりみられ、人数が多くなればますますその傾向が強まるといえることができる。

このことは、幼児の友人関係において、相互の人間理解がきわめて低い段階にあることを示しており、その結びつきの深くないことがここでもあきらかである。